

広島県立美術館

研究紀要

第14号

- 児玉希望と戊辰会（一）…………… 永井 明生 1（46）
—資料紹介・原田信造著「戊辰会史」
- 資料紹介：1910年代前半の南薫造…………… 藤崎 綾 34（13）
—1912～15年の日記と版画制作
- 中央アジアの民族衣装・女性用脚衣についての一考察…………… 福田 浩子 46（1）
—広島県立美術館蔵ウズベクのイシュトン、トルクメンのバラクを中心に—

2011



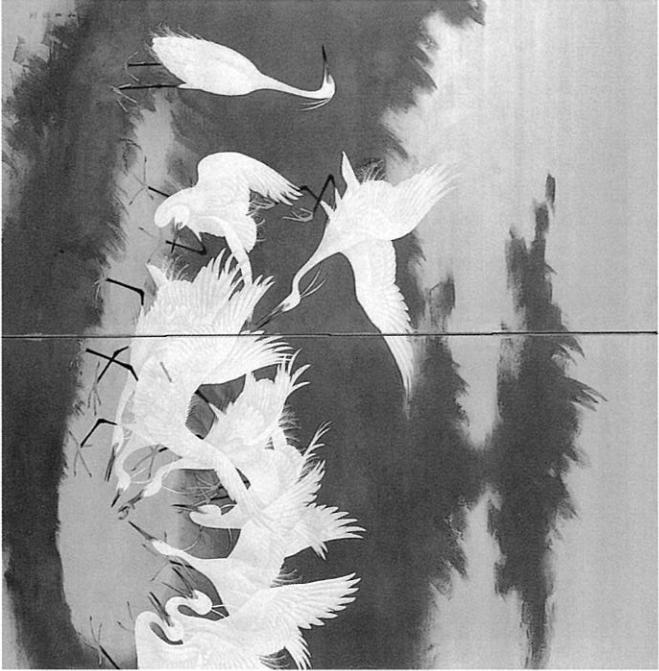
BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.14

- A Consideration on the Women's Leg Wear of Central Asian Traditional Costumes
of the Collection of Hiroshima Prefectural Art Museum: Focused Uzbek *Ishton* &
Turkmen *Balak* (46) 1
FUKUDA SIDDIQI, Hiroko
- Activity of Kunzo Minami in the First Half of 1910's (13) 34
FUJISAKI, Aya
- Kibo Kodama and *Boshin-kai* (I) (1) 46
Introduction of the Material "The History of *Boshin-kai*" Written by Shinzo Harada
NAGAI, Akio

2011

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



(口絵1) 児玉希望《鳥鷺》昭和12(1937)年
第8回戊辰会展出品作 水野美術館蔵



【資料】

【凡例】

一、本資料は、美術雑誌『美之國』所載の原田信造著「戊辰会史」（3回連載）全文を転載するものである。

一、第一回目の「戊辰会史」は『美之國』第十四卷第九号（通巻第百六十号）〔昭和十三年九月一日発行〕十二頁から十五頁までの掲載、第二回目の「戊辰会史：続」は『美之國』第十四卷第十号（通巻第百六十一号）〔昭和十三年十月一日発行〕七十六頁から七十九頁までの掲載、第三回目の「戊辰会史—期待さる明春の新戊辰会展」は『美之國』第十四卷第十二号（通巻第百六十三号）〔昭和十三年十二月一日発行〕五十八頁から六十頁までの掲載である。

一、漢字表記については、原則として新字体とした。ただし、固有名詞（人物名・作品名等）は、必要に応じて旧字体のままとした部分もある。

一、平仮名表記については、現行表記に修正して記載した。

一、原則として原文を尊重しそのまま記載した。句読点の用い方が適当でないと思われる箇所についても、原文のまま提示した。ただし、明らかな誤字については修正をおこなった。

戊辰会史

原田 信造

戊辰会も、つい此頃のように、人々の耳を新に打つのに係らず、か
がなべて既に、十二年も経過している。私は、その歴史を鑑み、追想
し、画壇の諸事相と較べたりして、いろいろと稿本を作つて見たので
あった。これは発表しようというのではなくて以て「明日」への考察
に構えようとしたのである。そして全く私自身の「明日」へのための
頗る個人的なものであったが、どうやら之れが、画壇への「明日」で
あり、当来戊辰会への「明日」であり得れば、よい事であると、改め
て戊辰会史を書いて見る事とした。

戊辰会の性質

戊辰会は、今日では、川合玉堂氏の薰陶下にある長流画塾の中樞階
級で組織されている研究機関であり、現画壇に独立したる地歩を持つ
美術団体である。平常の必至な研究、又は月次十五日の研究会の作品
は公示されないが、毎年春季に、作品展覧会を開催することによって
画壇に発表し、美術に関心をもつ他の世界と親しみ合うのである。

長流画塾だけの作家の戊辰会であるが、長流画塾の戊辰会ではない。その事は後に説明する機会がある。

下萌会の休止

長流画塾の内には、嘗つて、下萌会という研究団体があった。畢竟戊辰会を書くためには、下萌会との関係を書かなければならない。私は残暑の酷さの中でペンを動かす材料を渉猟しているわけで、甚だ下萌会の幽霊を探しているようで、御苦労千萬なわけではあるが、「美の國」が出る時は、親書秋燈の時であろう。下萌会は明治二十二年三月川合玉堂氏二十七歳の時、その長流画塾の中に出て来た。京都から東上して僅に四年だが、展覧会成績は頗る前から優賞に優賞で、名声漸く赫赫、画塾門生殺倒の盛んさであった。玉堂氏は、その年に前期院展へ「小松内府」という鎧人物を出品して優賞を得た。で下萌会はもとと単なる研究団体以上に出なかつたが、十年目の明治四十二年に、十周年記念で展覧会をやるうというのだ。「美の國」も、明年は十五周年に相当するので、大々的にやるべしだ。社会―美術界も、何とか云つても、当然之を迎えて、大いに賑いに加餐すべしだと思ふ。さて、下萌会は陽春四月に神田区仲猿楽町に当時あつた女芸学校の講堂を借りて開催した、学年末の休みだったのである。牧野伸頭伯は、玉堂氏と殊に深い間柄のことは、周知であるが、その牧野伯も、その時来て御覧じている。下萌会はそれ切り展覧会をしないで、大正七年創立二十年目に第二回展を開いた今度は三越である。文展十二回の年で、翌年は帝展に改造されるという動揺期、十二年の安楽土が覆るといふ

のだから、画家に与えた感激は松田改組如きでない。下萌会もそれにつづいて翌年から第三回以下、毎年三越で展覧会を開きつづけた。帝展改造の時喉元の熱かつたのが、更に十年もする間には、下萌会は、先生の玉堂氏は帝国美術院会員となるを始め、愈々、益々、エラクならるるその勢をもつて、大分墮安的になつて来た。玉堂氏の深慮たるや、大正末年に到つて、下萌会展覧会の停止を命じられたのである。

長流画塾の新進若手である長谷川光孝、児玉希望等の諸氏は、卒先して、展覧会の継続運動を企て、佐々木尚文等の先輩を説き催して、専ら玉堂氏に、その継続の懇請に努めた情の切なるには温君子玉堂氏も、再び請を容れ、翌年は御不例のため開催出来なかつたが、越えて昭和二年春、下萌会第十回展覧会を続開したのである。處が展覧会の蓋を開けて見ると、急先鋒の長谷川氏は小点しか出来ず、児玉希望氏は腸チブス臥床不出品、佐々木尚文氏その他不出品もあつて、遺憾ではあつたが、玉堂氏の休止命令に拍車を掛けるような有様となつた。玉堂氏は断然休止！を宣されたから、下萌会幹事を開いたり、協議したりしたものの、叶はず。茲に昭和二年十一月十五日、下萌会は創立満三十年、展覧会第十回を以て、事実上の終止符を打つてしまつた。

かくて、川合玉堂画塾は、大本の長流画塾に還元した。

戊辰会の濫觴

昔話が長いので、如何に秋燈の下でも、御怠屈様の次第ではあつたが、以上を書かないと、どうも話の順序が付かないのである。

戊辰会の濫觴は、下萌会が、昭和二年十一月十五日休止と決定した即夜である。同夜、長谷川光孝氏は、下谷区谷中初音町の新しい児玉希望氏の宅に馳せ付けて、下萌会休止となる上は、自分達で作品発表機関を造りたい、と説き、当初は躊躇していた児玉氏を説得して即席メンバーを決定し、折柄上州に旅行中であった磯部草丘氏を電報で召致するやら、大急行工策で、翌十六日夕方から、本郷区切通し坂上の牛肉店江知勝楼上に集合した。その顔触れは、長谷川、児玉二氏の外、磯部草丘、田中針水、藤井霞郷、古屋苔軒、島春潮、鈴木有哉、すべて八氏であった。これに、顧問玉堂氏を加えれば、戊辰会第一回展覧会の全顔触で戊辰会は、下萌会休止後、僅か一日を出でずして、早くも出来上ったのである。

長谷川と児玉

長谷川光孝氏は、本所区外手町厩橋向うの彫金の名家長谷川一清の息で大正二年に長流画塾に入った。玉堂氏が、大正四年上野美術学校の教授になった後、その画塾も亦、自然美学校の学生の入塾が盛んになったのであるが、長谷川氏も、その後美術学校の日本画科に入学したのであるが、入って画塾に於て、学校系の先輩の門下である、出でて学校では学生として、玉堂氏に就くという有様で、甚だ玉堂氏には寵愛を蒙った。戊辰会の成立にも、その徳は少くなかったであろう。彼の作品が、帝展に初入選したのは大正十四年の第六回で「野梅」であった。児玉氏の初入選大正十年に較べては、長流画塾にずっと前から居て、既に大正七年のその第二回展に「コスモス」「七面鳥」「晩秋」の三点

を出し、大正十三年の第八回「麦ふみ」次の第九回「風ぎたる海」などに続けていい作品を出しているに係らず、帝展出発は大分遅れている。帝展初入選からは、つづいて第七回に「春の名残」第八回に「積邊初夏」を出したのと、戊辰会第一回に、「裏藪に春来る」「氷地」の二点を見せたきりで、早世した彼氏の作品は、甚だ少数である。が、当時は実力を以て、児玉氏とは両々好個の敵手であり、後に書くけれど、早世した実力を世間に知らさず、仮初めの病気から、あたら名花の蕾を散らして了ったのは、惜みても猶余りある事だった。

之れに引かえて、児玉希望氏の筆力絶倫なのは、大正七年十二月、長流画塾に入塾すると、その翌八年の下萌会第三回展覧会には、早くも「桃咲く端山」を出品し、玉堂氏を始め、塾の先輩をして、瞠目させたが、以来下萌会には長谷川氏前記の「麦ふみ」の時には、児玉氏「郊外の杉林」を、長谷川氏「風ぎたる」と同時に、児玉氏「桃花小禽図」を出している。帝展には、大正十年の第三回帝展初入選「夏の山」以来、第四回「野のちぐさ」第五回「新緑の深山」第六回「晩春」、昭和改元の第七回「林檎花」第八回「雨後」第九回「盛秋」（特選）第十一回「暮春」（無鑑査）第十二回「飛泉淙々」（推薦）第十三回「山とよむ」（審査員）第十四回「猿猴捉月」第十五回「黎明」昭和十年の帝展改組には「指定」に任ぜられ、翌年の新帝展には、六曲一双「枯野」の大作を出品。一回の休缺もなしに、素晴らしき好成績は、「画壇稀れに見るところである。その外に戊辰会の第一回に「幽溪錦秋」「麗春」の二作以来毎回出品をつづけ。公展では、大正九年の中央美術展。昭和元年以来二回に亙る聖徳太子奉賛会出品等があり。これに皇后宮六曲一双草花御屏風を始め奉り。私的 작품을併せたら大変なものであ

る。これだけの力が決して徒然でないのは、彼を少しく見れば直ちに首肯出来るのである。

彼は中国の産である。中国と申しても広うござんす、広島県は高田の郡来原村、そこは中国山脈の尾根にあって、犬伏山に近い世襲の名門であったが、十九歳の時、家運逆境、笈を負うて郷間を出で、東上を志したのは、大正五年の夏であったが、旅途も非常な苦心をして、その年末に上京後も苦学力行、以来数年に亘る苦業生活を切抜け成功した精悍豪毅は正に立志伝的な存在だ。

家伝は。藤原鎌足に出で。関白道隆の孫伊行が武蔵国児玉郡に居り。武蔵七黨の児玉黨の祖となつたのが。後に安芸に移つて。「石山軍記」などに見る武勇伝その他を累代あらわして居り。毛利輝元との関係後。郡山城の北。原田村字簾（スダレ）に土着し。代々地方の豪族として。近隣に響いたのである。今に本簾（ホンスダレ）の児玉家と称されて其名門の名を留めている、斯うした豪族武人の血をうけて。希望氏は画壇に勇躍果敢であるから。長流画塾に牛耳つたり、戊辰会に頭梁したり、画壇に席卷する慨をもつのも、伝統、経歴、苦業などが綜合されて、考えられ、その決して徒然でないのを思わせるのである。

彼が社会的にその地位を隆盛した後、郷里に錦を着て帰るの旅をし、舊地を復し、舊恩を報じ、掃苔の営みをしたが、之れに同行した某氏の話によると。「彼の誕生地の鎮守である八幡社には、その十三歳の献納という加藤清正が馬上で虎を突いている横二尺位の絵馬があり、附近の三次（ミヨシ）町の沖家には、十六歳筆という狩野風の瀑布が紙本大幅に画かれあったが、瀑布は殊に剛健で少年時代から恐るべき気魄を蔵していた事が知られるのでした」というから、画には幼少か

ら志が深かった事が覗われる。

長谷川と児玉のコンビは、維新の大業が、宮闕の公卿と、南国の猛雄の連続に成つたのを思わずには居られない。この双個の抱擁がなかつたらば、如何に若い画生の熱烈な芸術欲が燃えたとして、恐らく、今日の戊辰会の礎石を打ち得なかつたであろう。他の六人の事は、後に譲る。

疾風迅雷的

さて、江知勝楼上の、牛鍋はグツグツと煮えている。昭和二年十一月十六日の夜の寒さに酒は、大分勇気を添えている。八人によって、飽く迄展覧会必至の協議は着々と進められて行つた。そして、之れからは、我々同人組織によつて、自他相互の研究を発表し、芸術発揮をしよう、玉堂先生に此事をお願いしようという段取其他の計画を定めたのである。翌十七日午前、一同は打揃うて、玉堂氏の膝下に、熱誠を披瀝して、其旨を申し出た。玉堂氏は、この願いを許容されたのである。ここに、下萌会の休止は何故であるか、若き戊辰会の許容は何を意味したか、両個の消長が覗われるのである。

八人は雀躍して師の門を出づるや急遽、時を緩めず、菊池華秋、松本姿水、今中素友、清水有声、山内多門、佐々木尚文、長野草風の諸先輩を歴訪し、われわれ相互の研究による玉堂先生御許可展覧会開催の事を話し、其賛成を得、更に部署を分ち、児玉、長谷川は平田松堂へ、古屋、島は伊藤響浦氏へ、同様賛成を求めたのであった。これだけの事が、間髪を容れぬ迅速敏捷で敢行された、実に下萌会が休止の

後、僅か一日で仕遂げられたのである。戊辰会は、玉堂先生を顧問とし、明春三月会場を下萌会恒例であった三越を占拠して、第一回展覽会開催の段取迄も確定した。飽くまで、疾風迅雷的である。一寸、書いて置きたいのは、事態を見るの明ある長野草風氏が、他の下萌会幹事と行を同じうせず、この間少なからぬ努力をした事で、彼氏は戊辰会第一回展覽会には、卒先して賛助出品をしているのである。

この疾風迅雷、果敢な後進若手の運動は、下萌会の幹部、長流画塾の先輩を正に愕然とさせ、その感情に少なからぬ衝激を与えたに違いない。が、戊辰会の気鋭なる、そうした事を顧みず、歳晩押迫る十二月八日、恰も長谷川、児玉二氏で戊辰会の濫觴的謀議をしたと同じ、谷中初音町の児玉氏方二階に一同集合して、明春の第一回旗上げ展覽会の打合せをした。この日鈴木有哉氏だけは旅行欠席したが、他は全員顔を打揃え、同月、二十五日には、下図持寄り会を終了し、明春へ備える用意、着々と進んで行った。

恰も昭和三年が、「戊辰」の干支に相当するので、戊辰会と会名をつくったのではあるが、明治元年維新が、同じ「戊辰」であるのにも想い合される處に、一層の意義が深い。（つづく）

戊辰会史……………続

原 田 信 造

旗上げ展とその機

川合玉堂氏門、長流画塾の下萌会が、三十年にして美術界から存在を消した。すぐ入れ代わりまして勃然起つた戊辰会が、入れ代りばえがあるか何うかは待望と注視の焦点となつたのであるから戊辰会の誕生も好機を掴んで華々しいものだった。しかも児玉希望氏一だつて、帝展の成績は、大正十年以来連戦連勝ではあつたが、その「盛秋」が特選になつたのは戊辰会第一回展の年の秋のことだし、磯部草丘氏は、大正十三年既に「冬ざれ」で初入選したが、その後、戊辰会第一回展までは出品なく、永い間特選を噂されつつも「葉月の潮」がその実現を見たのは、松田改組の前年、昭和九年というのだからまだまだ遠い事であつた。島春潮、鈴木有哉の両氏は、戊辰会第一回展に先立つ昭和二年秋、春潮氏の「老梨」、有哉氏の「香春廟」で共に初入選したばかりで、古屋苔軒氏は、それから三年目の昭和五年に「夕立」で入選したのだ。田中針水氏は、戊辰会第一回展の年が始めての帝展入り、題は「春」という次第であるから、既に各氏とも各種の作品を見せて

はいたものの、帝展への定連としてハッキリと顔を出しているのは、希望氏ひとり、長谷川光孝氏が大正十四年の「野梅」から三年間つづいて、「春の名残」「磧邊初夏」三点を出品しただけのメンバーであったから、世間の眼にはまだまだの後進であった。それが下萌会の展覧会の本城を襲うて、三越で堂々と作品発表するというのであるから、全く？の問題である。しかし何しろ、チャンスがチャンスである。華々しく、幸先のよい事で、それが当たったのだから慶祝すべきめでたさであるのである。

展覧会は陽春三月、先生の玉堂氏が顧問で「八哥鳥」一点を出品され、下萌会旧幹部中、わずかに、長野草風氏のみ一人が、「賛助出品」をして、「木の葉舞ふ」を出品した外は、江知勝で肉鍋当初の創立八人で、他を混えず、フン張ったのであった。

「裏藪に春来る」「氷地」

長谷川光孝

「牡丹」

島 春潮

「祭の日二題」

古家苔軒

「春秋一千二百年」

鈴木有哉

「八瀬晩秋」「大原山中」

藤井霞郷

「毬をつく」「秋思」

田中針水

「雪の天沼弁天」「荻窪早春」

磯部草丘

「幽溪錦秋」「麗春」

児玉希望

気鋭、意壮なる新来の若い人が粉骨精励、鏤心彫身の作品、しかもいづれ劣らぬ一画面を会場狭しと陳列したのだから、観者の悉くはま

ずその熾烈な奮闘ぶりに動かされた。その作品が二ヶ月足らずの成果だというのを聞いては、感激と賞讃の声を以て迎えた。好評好評で、会員の「幽溪錦秋」「麗春」「荻窪早春」「氷地」「毬をつく」「牡丹」「裏藪に春来る」及び玉堂氏の「八哥鳥」は、即時売約となったのである。この歓声を浴びて美術界の一角に立った一同の欣躍ぶりも想うべしである。

猶、同年秋の帝展に、希望氏の特選「盛秋」を送り、磯部草丘氏の「梁の豊秋村」は特選候補で好評を博し、針水氏初入選を見たのだから展覧会の前途に栄光を示し、一段とその名声と信用を重からしめたのである。実際に、若い人の創造された団体で斯程までに見事な順序に造り上げられたのは前例がない。苟も団体創起たるものは、同会の出発に留意さるべく遮般のもろもろに考えさせられるの用意を待たねばならぬ。

長谷川氏の死

華やかなりし、第一回展覧会が終つて、翌年の春には早くも悲しみが見舞つて来た。それは戊辰会の創立の原動力者であった長谷川光孝氏の痛ましい死であった。

光孝氏は第一回展の直後、俄然発病して倒れたので、茨城県磯濱に転地し、一度帰京したものの、間もなく千葉県市川に転地したきりで、昭和三年の秋は、自分は帝展の出品も不可能に陥り、ただ盟友希望氏「盛秋」が帝展で、特選となった華やかな快報を聴きつつ越年、翌四年、戊辰会第二回展には、小品でもいいから出品という意図を伝えられた

が病状遂に許されず、芸術的悶々に嘖まれつつ、遂に春三月三十日午後三時、行年僅に三十四歳、豊かなる幾春秋を残して市川に不帰の客とはなった。彦根城頭、この訃報を知った草丘氏、急遽帰京したが生前再び相会せず、希望氏亦京洛の旅にあつて其臨終に遭わず、戊辰会創造の君子は、憾み蔵して遂に逝つたのである。

第二回展以後

戊辰会は、第一回旗上げ展が頗る好人気を呼んだのにつづいて翌昭和四年三月、同じ三越で第二回を開催した。ここに注意さるべきは元来会の動向は全会員の一致によって決行さるのであるが、この時既に、その総指揮の任は自ずから児玉希望氏に帰趨した。創立の時から第一回展にかけては、實際上にその枢軸を長谷川氏と共にやっていた希望氏は、第二回目からはひとりになった。一体、創造までは二人のコンビが実によく効を奏して行つたのであるが、事成つた爾今は、所断敢行の独裁の方が都合がよい。都合よくも事態は、独裁力に恵まれた希望氏のひとり舞台となった。「都合よくも」と云うと、長谷川氏の死を悲しまぬかの如く見られるが、決してそういう意味ではないことを断つて置く。もはや事態は独裁敢行と迄行かぬと、戊辰会の発達、最後まで勝利は出来ぬやうになった。希望氏ひとりになった事が必ずや成功すべき多分の順調を持っていた。その間、磯部草丘氏がよく同氏を補佐して、統率の任を全うせしめた事も見逃せないのである。

第二回展の前には光孝氏存在せりと雖、出品は危うく、藤井霞郷氏亦病む。そこで、長流画塾から水野陽翠氏を会員の満場一致で新会員

にした（実は希望氏の推薦与つて多しというが）。陽翠氏は昭和五年の「春潤」を帝展入選とする程で、全くいづこの展覧会へも嘗てその成績を発表して居ない。全く白面の氏が、戊辰会の創立会員に次いで真先きに加へられたことは、平素の長流画塾研究会の成績の凄まじき勉強にも依るが、二十八歳猶他を顧みないで孜々たるも認められたのであろう。第二回展は、長谷川、藤井二氏共、果して不出品で、下萌会旧幹部から松本姿水氏が新に「賛助出品」として「晴雪」を以て加わり、従前からの長野草風氏「かくれ蓑」を出品し、顧問玉堂氏の「湯虎」を上置きにして、

「霽雪」「千草の丘」	児玉希望
「梅花村」「楊柳村」	磯部草丘
「雪籬」	島 春潮
「童女」「雪の朝」	田中針水
「夏の白濱村」	古屋苔軒
「溪山秋色」「山家の秋」	水野陽翠

今回も好評の拍車をかけたが、翌昭和五年は、聖徳太子奉賛会の展覧会に参加のため戊辰会を休会した。昭和六年の第三回展以来、昭和九年の第六回までの間には田崎芙山（第三回より）、女流高田那美（第四回より）、石渡風古、太田一彩、甲斐常一、花村晃敏（以上五回より）、古屋正壽、山下巖、川崎求霞（第六回より）の九名を加えている。古屋、山下、川崎三氏は、山内多門氏の旧若葉会の中から会員とされたもので、戊辰会が若葉会をも抱擁するという大を示して拔擢された人々の

将来も有意である。しかし若葉会の抱擁までしたのであるから、昭和九年の第六回展で、増員はまず一段落を告げたのである。そして、十年の第七回展にはこの増員陣容の華々しさで開催した。

満十年の意義

昭和十年九月十五日、本郷区湯島の国醇堂で戊辰会は総会を招集した。この年は松田改組問題で、わが美術界は騒然たる時であった。この召集も亦之れが検討をし、善処するためであった。

長野草風、松本姿水の両「賛助出品」者は、会員以上に優待の意味を含んでいたのだが、之れを廃めて改めて平会員の交渉をし（二氏共受諾）。村雲大撲子氏のような画人であり行政の才能豊なるひとを会員に起用し、井上恒也、野添草郷二氏を増員した。又、新に幹事制を定め、磯部草丘、古屋正壽、太田一彩三氏に、右の新会員村雲氏を一枚加えた。というような事が、当日新定されたのを見ると、戊辰会の将来性に備え、拡大強化を志した事の一斑が察せられ、馳て来る帝展改組、新帝展につぐ新文展と、わが美術行政は激転し始めて、その趨帰の何れかとも分らないものに善処すべく、戊辰会が当美術界に対して何か目論見の大いなるものを覚悟したことが知られるのである。

この幹事制に、児玉希望氏は入っていない。長野、松本二氏を「賛助出品」から平会員にした代りに、氏亦、平会員になったのであると対外的に見るべきだが、彼氏が独裁的把権者であるため、幹事に入らない（これを指揮する）と見る方が本当である。

昭和十年は帝展を開かず、翌十一年の春に持越して開催されたた

め、戊辰会恒例の三月の展覧会は休会したのであった。昭和十一年という歳は、そして、その歳晩は恰も、戊辰会濫觴の満十週目に相当した。その十二月二十二日である。長流画塾から更に十一名の新会員と、二十四名の新制による「会友」を詮衡して容れた。新会員の方は、旧下萌幹部が多数を占めていて、則ち、下萌会から戊辰会の撰入であり、戊辰会と下萌会は、満十年、茲に上下位置を替えたのである。いな位置を替える以上、これを抱合して、拡大強化して明日への大なる進展に基礎を固うしたのである。賛助の平会員も、幹事制も、これに備える一前提であった。幹事は改めて磯部、島、井上、水野、村雲の五氏。更に評議制を設けて、長野、松本、菊池華秋、佐々木尚文、今中素友、児玉の六氏。そして、幹事は事実上児玉氏の意見に徴して事を処理進行する事となった。戊辰会の行政もいよいよ将来へ統制のよさを見るであろう事だ。「美之國」新年号に其拡大強化に就て（児玉希望）という記録が載っている。拡大会員、会友、強化宣言、趣旨等の詳しい記録である。それを反覆書くことを省略する。

昭和十二年一月八日、神田区須田町の料亭川しまで、戊辰会全会員三十二名、新会友二十四名、併せて五十六名の拡大強化勢揃いの総会を開き、下図持寄りと新年会を兼ね、会場の意気実に旺盛、下図持寄り七十三点に及び、同年三月の第八回展覧会の喚声を挙げた。

十年の功労者

斯くて十週年を以て第一期的完成を遂げたと見る事が出来るならば、爾今の拡大強化は、既に新戊辰会である。或は、茲に総合的の名

称をつけてもいいのである。そして、長流画会、下萌会、戊辰会、第三会、などの名称が、この作品発表機関に見出されるのである。既に、戊辰会は、公募をこそしないが、長流画塾の塾展ではない。塾展でないとする、まず「長流画会」とでも名づくべきだ。これが一つ、下萌会は休止ではあるが、下萌会は正式解散をしているのではないから、現在、多数にその旧会員を抱擁している限り、下萌会を必ずしも無視するわけには行かぬ。これが一つ、戊辰会を別に改称の必要はないというのが一つ、第三者的名称を新造しようかというのを、仮に第三会とここに書いて置いたが、これが一つ、以上の如く、必然に考えられるべき立場に立ったわけである。

結局、戊辰会の名を殊更に変替するにも及ばないというので、矢張り戊辰会（但し十週年後、新しく強化した、更に一層美術界的独立地歩を確踏し拡大する意味の）が継続して行くのである。なぜ、こんな「アんだ」というような冗語を書いたかといえばこの改新の区劃時に於て、一応こうした無駄かに見えるものを新基礎石の一つに投げて置くのがいい事なのである。つまり、矢張り戊辰会なる哉という検討的結論をして見たのである。

さて戊辰会を造り上げた抑も最初の人と云えば、云わずもがな児玉希望氏であり、その手腕才力によって、実に戊辰会はここ迄来たことを誰も否めない。しかし、全玉堂氏傘下を抱合した会であり、希望氏の雄断によって、新古の差別を一擲して各自平和の立場に於て、戊辰会は続行さる事となった。

長流画塾だけの作家の戊辰会ではあるが、長流画塾の戊辰会ではないと劈頭に書いたので、その関係をついでに説明して置く。長流画

塾は、昭和三年五月二十日、日本橋区濱町の日本橋倶楽部で、その「研究大会展覧」を、一日だけ開催したことがあったが、長流画塾の展覧会といえば、前後ただ之れ一回だけであると思う。下萌会休止、戊辰会新生などの事情があったために、右の開催が促がされたのだが、同展覧は今後も時に応じ行われると云われつつ、その後は嘗つてない。であるから長流画塾は、自分で発表の機関をもたないが、平素の成績如何によって、戊辰会の会友になる事が出来、会友は同会出品の資格（陳列可否かは作品次第である）を有するのである。

事変下にも、幸いに美術界の至誠なるや秋のシーズンを賑わしく招来した。真にめでたい事である。「戊辰会史」は今回で完了しなかった。しかし貴重な時期を当分遠慮して、次の機会に拡大強化の結果、及び将来如何を以て完結としたい。相互に考えなければならぬのは、最後の五分にあるのだから。（続）

戊辰会史

―期待される明春の新戊辰会展―

原 田 信 造

拡大強化の内容

戊辰会が満十週年の終りを期して、新古一丸大統合拡大強化を成就し、昭和十二年一月八日その勢揃いの総会が、下図持寄り会及び新年会を兼ねて、神田の川島で開催された。下図の持寄られたもの七十三点、大いに同春開催の拡大強化、第八回展覧会の氣勢を挙げたところで、「十月号」は終りとなっていたのである。

愈々、同三月二十六日には、淀橋区角筈の偕楽荘を会場として、第八回展覧会の出品受付が開始された。顧問川合玉堂先生以外の作品四十四点、この内児玉希望氏の「烏鷺」対作を二点に数算して、総べて四十五点である。今回の拡大強化たるや規律厳粛従来の曖昧ルーズな態度を改正したので、正午開始の審査劈頭、早くも規律断行問題が惹起した。それは横浜に住む会員水野陽翠氏が、運搬店に托した作品が不着であるというので、事情審査を開くに到り、合議によって、一

時間開始を延長した。同作品は間もなく着到したのであるが、その緊張ぶりは、是れ程であった。之れを緊張の前奏曲として、愈々相互審査は開始され、先ず児玉希望氏から、相互審査の方針信条を縷説し、一々、作品を前にして、慎重審査は始められた。先ず

烏鷺(双幅) 児玉希望

満場一致で通過した。希望氏は、この前年の昭和十一年、新帝展に「枯野」を出品して以来、官展へは不出品であったが、今秋の文展第二回に審査員となり、「七面鳥」を久しぶりで出品した。それが頗る画期的のもので、従前の作から俄然堂々と大を成し、人目を驚かしたが、この「烏鷺」双幅も亦、画期的力作であるのに、一同を刮目させたのである。「七面鳥」も「烏鷺」も、第二回文展、国家総動員で、久しぶりの出品という時とか、戊辰会の拡大強化進展という機会になると、希望氏の芸術心は、馬力をかけて燃え盛る模様である。相互審査には、余談であるが、何しろ、それ程に「烏鷺」は画期的力作だった。トップに起った規律問題と云い、希望氏が率先斯る力作を二点まで出品したことと云い、会場の空気は、いやが上にも緊張して、出品者中には自己作品乃至その態度を顧みて、甚だ忸怩させられた人々もあるかに見えた。

恵	池	古屋苔軒
はぐくみ		井上恒也
春	水	磯部草丘
春		菊地華秋
搏	つ	今中素友

友を呼ぶ 石渡風古
雪晴れ 松本姿水

の七点は異議なく通過した。これが第一回目に四十五点を一巡した審査の結果である。即ち、希望氏のを二点として、九点を挙げたわけで、総数の二割通過であった。

続いて第二回目作品一巡から、冬郊（村雲大樸子）、飼い鳥（藤井観文）、濱（水野陽翠）の三点を通過させた。斯くするもの更に二回にして、花垣（田中針水）、鷹（高田美一）、猫（中村黎峯）、山の春（山下巖）、秋老（神谷五台）、ほろほろ鳥（大野重幸）を通過させた。ここに動議をもって、無記名投票法を適用し、秋茄子（田崎芙山）、潮香（野添草郷）、田の祭（会友福宿一穂）、秋谿（伊藤響浦）、春雨（花村晃歎）の五点を容れ、更に雪意（甲斐常一）、人形（千島華洋）の二点を補充し、最後に顧問に向って、陳列壁面に更に二点を置くべき余地があるので、これ以上は、玉堂先生の選に委したき旨を申入れた処氏は「相互審査は実に充分である自分の容喙すべきでない」と辞されたが、強いて其意向を伺うて、谷間の雪（会友田中宏明）、深山清秋（会友石塚晃溪）の二点と定め、総数廿八点を陳列と確定した。

この相互審査は、出品者全数と、出品会員、会友立会いの上、顧問も臨場されたので、非常な厳律肅正裡に堂々と執行されたものである。序に記し置くべきは、顧問は別として出品総数四十五点（四十四人）、陳列総数二十八点（同上で二十七人）であるから十七点（十七人）は落第した。当時は、会員三十二名、会友二十四名であったから不出品も十二名あったのである。落第者の名などは記すべきでなからう。

関西への進出

以上作品に、顧問川合玉堂先生出品さるところの「春立つ御濠」横物、「島の春」豎物の二作を併せて、総数三十点は、堂々と、拡大強化の旺盛ぶり華やかに、三月二十九日から四月二日まで、恒例の日本橋三越で開展された。附記すべきは、同展には「帝都三十二景」の合作画帖が併せ陳列されたが、玉堂先生の「宮城」より希望氏の「弁慶橋」に至る春夏秋冬の四季それぞれに画かれて、一面に、昭和帝都風景として、永久に東京地歴的資料を遺したのであった。

戊辰会は展覧会に際し、「会告」を頒布し昭和三年以来執り来りたる指導精神を主張強調した。同展つづいて、大阪に始めての進出を試み、矢継ぎ早又も四月三越で開催児玉、磯部、村雲諸氏出張、これ亦盛會裡に終始し、戊辰会は東西に亘って、拡大強化の威容発揚に成功したのである。展覧会直後、神田の川島に東西両展報告を兼ねたる懇親会を催し、この既定養親に準拠し、十一月には更に檄を飛ばして、努力精勵を督し、十三年の運行に遺漏なからしめた。

其後の拡大強化

ことし、昭和十三年、前々よりの下図持寄りと、研鑽の累積によつて、三月二十四日、前回同様、角筈の偕楽荘に第九回展覧会作品の搬入受付をなし、午後一時締切ったところ、集る作品三十九点、又もや劈頭会友藤谷雅春氏の作品不到着の行違いを惹起したが、前回の水野

陽翠氏の二の舞的審議を経て受入れたが、更に遅刻して搬入した一点は、その理由薄弱のため却下されるの厳粛ぶりであった。玉堂先生も早刻より臨席あって、慎重相互審査を行い、先づ廿二点を通過し、二巡にして十七点の「甲」七点の「乙」を定め、次ぎに「甲」より六点を入選せしめ、合計廿八点を陳列することにした。通過の廿八点は前回同数で児玉希望氏は今回も「朝暉」「蘆雁」の二点を出品したので、人員も前回同様の廿七人。之に顧問玉堂先生の一点「朝もや」を加えた。

温	室(川合白流)	清	香(松本姿水)
べに	鶴(大野重幸)	野	兔(島春潮)
窓	(長嶋華涯)	雪	晴(菊地華秋)
蓮根堀り	(山下巖)	郊外浅春	(川崎求霞)
春	苑(井上恒也)	霧立つ白馬	(今中素友)
草	上(田中針水)	磧	の春(甲斐常一)
蒼	鷹(高田美一)	浄	土(鈴木有哉)
五月	晴(中村黎峰)	石垣	苺(宮野聚芳)
湖畔の朝	(水野陽翠)	雪	の後(藤谷雅春)
東	風(花村晃観)	早	春(野澤蓼洲)
楨	(藤井観文)	雪国情趣	(大貫鉄心)
相武台早春	(村雲大撲子)	干	渴(飯田九一)
末	黒野(磯部草丘)	朝	暉(児玉希望)
蘆	雁(児玉希望)	朝	もや(川合玉堂)

外に合作の「四季風物帖」玉堂先生の「田植」を始め三十作を併せ

て陳列した。右は天候気象に題材を求めたものである。

同展は、四月大阪(会場三越)へ第二回の進出をなし、前回の期待に、より以上の好況を収め凱旋した。重ねての東西制覇展覧会の旺盛を完了した四月二十一、二両日、玉堂先生を始め、会員会友中の四十余氏は懇親及び明年への精進緊張の志を以て、伊豆方面の旅行会を催した。沼津、天城、白浜、下田、蓮台寺(泊)、白浜、伊東、熱海のコースを執つて散会した。七月には、戊辰会は彩管報国の熾烈なる至情を捧げて、傷痍軍人慰問画作をなし、事変下に奉仕する処があった。拡大強化後、幹事に山下巖氏を増員し、会友に大貫鉄心、興津魚周、鬼頭如石の三氏を容れ、改めて会友の大野重幸、大貫鉄心、中村黎峯の三氏を会員に推挙した。一面会勢膨大に伴うて、花村晃観、飯田九一、石渡風古、田中針水の四氏を更に幹事として増員した。

戊辰会新建設へ

戊辰会の主脳に在る児玉希望氏は、会のために絶えず深慮を怠らなかつたが、拡大強化第一回、第二回の賑々しくも、華やかであつた好成绩の際にも深く顧み、静かに熟慮検討する事を怠らなかつたのである。拡大強化と共に行われた展覧会の出品陳列方法は、二回に亘つて、勿論世上既成展覧会のそれよりも進んだ方法であつたに違いないが、徒らに之れに依拠し反復重畳して行つたならば、必ずや情性的悪結果に陥り、折角の真義を失う事に到れば、由々しき事である。目醒しき躍進昂隆を期するならば、更に新しく、よき道を求めなければならぬ。戊辰会も展覧会を重ねること正に第十回を迎えんとし、創立より

かがなえて既に十二年の歳月を閲した。顧れば、創立当初の青年作家は、もはや一人前の画家となった。玉堂先生の長流画塾として思えば、四十年の歷程を過ぎ、門下は殆んど既成作家の圏中に入る。今更指導教育的展覧会の必要を認めなくなった時代に於て、如何に戊辰会の拡大強化が斯界の好評に乗っていると云つても何等の新意義なしに居らるべきでない。前進又前進、善処又善処、常に躍進興隆の一途を目指し来つた希望氏は、画期的の挙に出づべき時に、逢着した事を痛感し、十一月十五日の戊辰会総会席上、右の感懐を披瀝し、戊辰会新機革新策を謀り、満場一致之れが決定を見るに到つた。

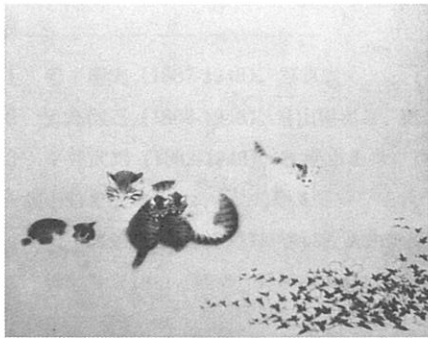
明春の新戊辰会

その内容は、略ぼ次の如くである。戊辰会は、明十四年三月の第十回展覧会を機として、従前の戊辰会ではなくして。会の性質は全然新基礎に立つのである。わが国展覧会としては、類例のない絶対高踏的展覧会となる筈である。顧問玉堂先生を始め、児玉希望氏以下、戊辰会を自己芸術発表の根拠本壘とし、文展其他の展覧会は、出城であり、進出戦場であるの覚悟で、少くとも、従前の展覧会作品というものは二倍三倍の努力を戊辰会に払われる筈である。それが一点の画作に於て二倍三倍が成されるか、作量に於て充たされるかは、その時の問題としても、必至斯ぐ如き努力はなされるに違いない。故出品陳列についても、壁面の都合などは、初めから考慮されないわけで、一般の展覧会意識の作品では、陳列は許されない。頗る高踏的なものとなり、点数は、何点という結果になるや必然である。それ程に、その展

覧会価値は絶対最高位に座すべく、否、わが美術界の超高峰を占拠せねば止むまじきである。前に文展を瞰下するかに書いたが、決して反文展などではないのは分り切つた事である。

戊辰会の精励努力による十二年の歷程が、茲に右の如き、素晴らしくも見事なる展覧会を現出せんとする事を書くのは、連載し来つた「戊辰会史」記者としては、絶大の欣快と、光栄をさえ感じるのである。大いに第十回、明春の展覧会に期待を掛けて、此稿を終る。（了）

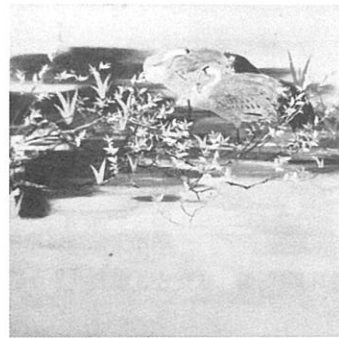
（ながいあきお／当館主任学芸員）



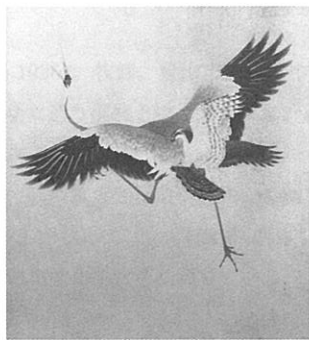
中村黎峰《猫》



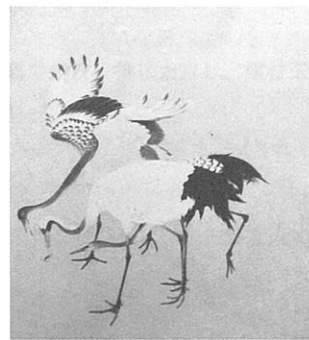
石渡風古《友を呼ぶ》



鳥春潮《玄鶴》



今中素友《討つ》



井上恒也《はぐくみ》



古屋苔軒《裏池》



田中宏明《谷間の雲》



村雲大撲子《冬郊》



田中針水《花垣》



藤井観文《飼い鳥》

広島県立美術館 研究紀要 第14号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.14

発行日 平成23(2011)年3月31日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22

2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel. 082-221-6246 Fax. 082-223-1444

印刷 大成印刷株式会社

〒731-0138 広島市安佐南区祇園3丁目24-17

Tel. 082-875-3232